

## 第5章 第28次調査（外来診療棟新営地点）

### 第1節 調査の概要

#### 1. 調査にいたる経緯

本学蔵本キャンパスにおいて外来診療棟の新営が計画された。建設予定地の位置は、弥生時代前期の水田が確認された第24次調査（藤井節郎記念医科学センター新営）地点の東側、同じく弥生時代前期の水田および、弥生時代終末期に破棄された前漢鏡（異体字銘帯鏡）の破鏡が出土した第17次調査（中央診療棟新営）地点の北側、弥生時代前期の畠が確認された第20次調査（西病棟新営）地点の約120m北側に位置する（第2図）。

既往の発掘調査成果から、本調査地点で弥生時代をはじめとする遺構・遺物の存在が予想されたため、3688 m<sup>2</sup>の範囲について発掘調査を実施した。

#### 2. 調査体制と期間

調査体制と期間は以下のとおりである。

調査主体 国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室（室長・中村 豊）

調査担当 中村 豊

遠部 慎（埋蔵文化財調査室・助教）

山口雄治（埋蔵文化財調査室・特任助教）

調査補助 岸本多美子・中原尚子・板東美幸・古川裕美・前田千夏・山本愛子

（以上、施設マネジメント部・技術補佐員）

調査期間 2012年7月2日～2013年1月19日

#### 3. 調査地点の位置と区割り

##### (1) 調査地点の位置

調査地点の所在地は徳島県徳島市蔵本町2丁目50番地の1である。本学蔵本キャンパスの東半中央付近に位置する（第2図）。

##### (2) 調査地点の区割り

本調査地点では、西半北側をA区、西半南側をB区、東半西側をC1区、東側をC2区に区分し、計4つの調査区を設定した。また、本調査地点は世界測地系に基づく平面直角座標系・第IV系のX=119750～119805m、Y=93990～94080mの範囲におさまり、この範囲のなかで座標値を基準に南北・



第49図 第3遺構面全体図と土層断面の位置

東西に5m間隔のグリッドを設定した（第49図）。

## 4. 調査の概要

本調査地点では、3つの遺構面を設定し調査を行った。その結果、第3遺構面で弥生時代前期中葉、第2遺構面で弥生時代前期末・中期初頭～中世の遺構が検出された。第1遺構面では明確な遺構は認められなかった。

### (1) 第3遺構面の遺構

弥生時代前期中葉の水田が検出された。水田は、標高1.2～1.5mで検出され、弥生時代前期中葉～前期末・中期初頭の洪水起源砂層に覆われていた。東西75m、南北50mの範囲のなかに、70枚程度の水田が確認された。ただし、調査地点の北端付近では水田は検出されず、北西部のA区では谷状の地形が確認された。また、調査地点南東隅にあたるC2区の南側では自然落ち込みが検出された。これらは、水田域の北限と南東限を示す可能性がある。B区で確認された大畦畔は、本調査地点の西側に位置する第24次調査地点北区（第2章）で確認された大畦畔とつながる可能性がある。

### (2) 第2遺構面の遺構

土坑・ピットが複数検出されたが、時期がわかる遺物が出土しておらず、遺構の所属時期は決定できない。ただし、既往の調査による層位学的な所見から弥生時代前期末・中期初頭～中世の範囲におさまるものと考えられる。

### (3) 出土遺物

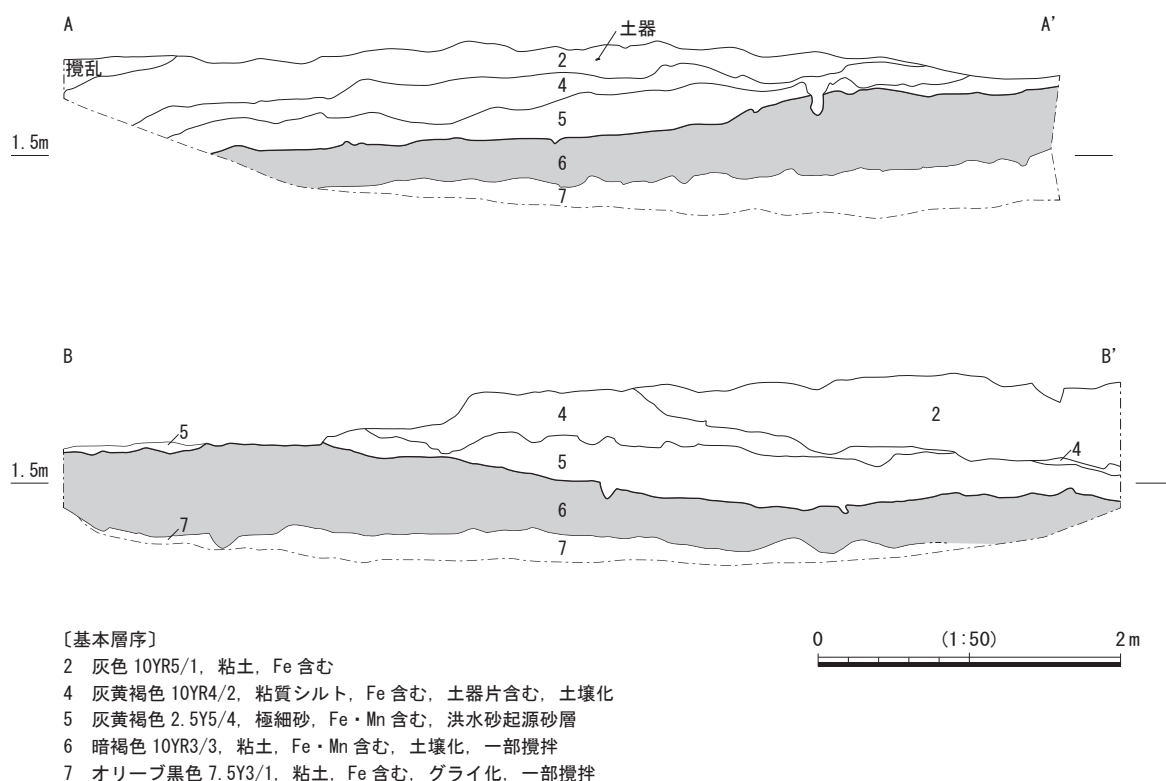
出土遺物は、弥生時代前期の土器と炭化鱗茎付着土器、粗製剥片石器、打製石斧、打製石鏃が検出された。また、近世から現代の陶磁器類が攪乱・表土から採集された。出土遺物の量はコンテナで、土器・陶磁器4箱、石器1箱、植物種実1箱である。

## 第2節 調査成果

### 1. 基本層序

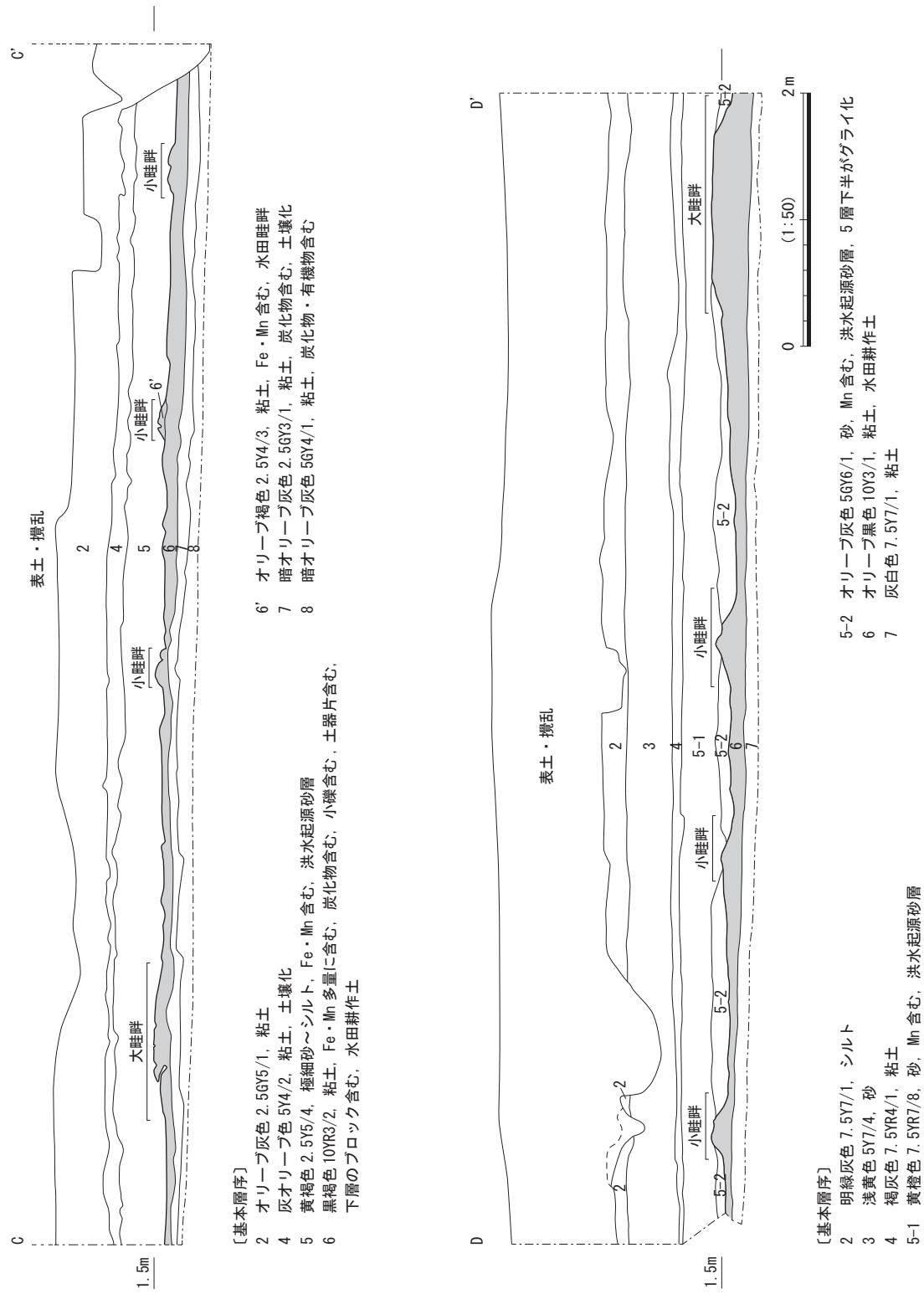
第49図に土層断面図を記録した位置を示している。1～5層についてはB区南壁E-E'土層断面（第52図）、6～11層はC1区サブトレンチ東壁・南壁H-H'土層断面（第55図）を基準とし、必要に応じて他地区の層序を用い説明する。また、既往の調査成果（中村2000aなど、本書第20図）を参照しつつ各層の年代を比定した。

**表土・攪乱** 現地表面は標高3.2～3.3m、厚さ80～90cm程度である。近代以降に形成されたと考えられる。

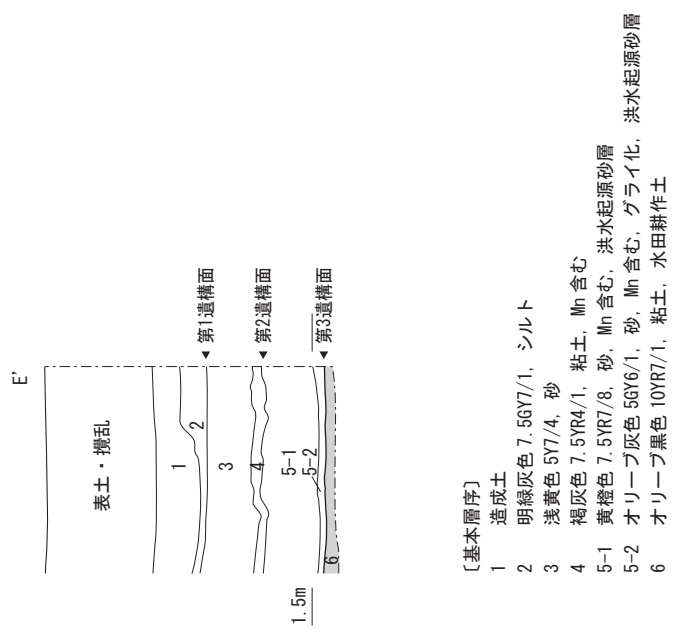
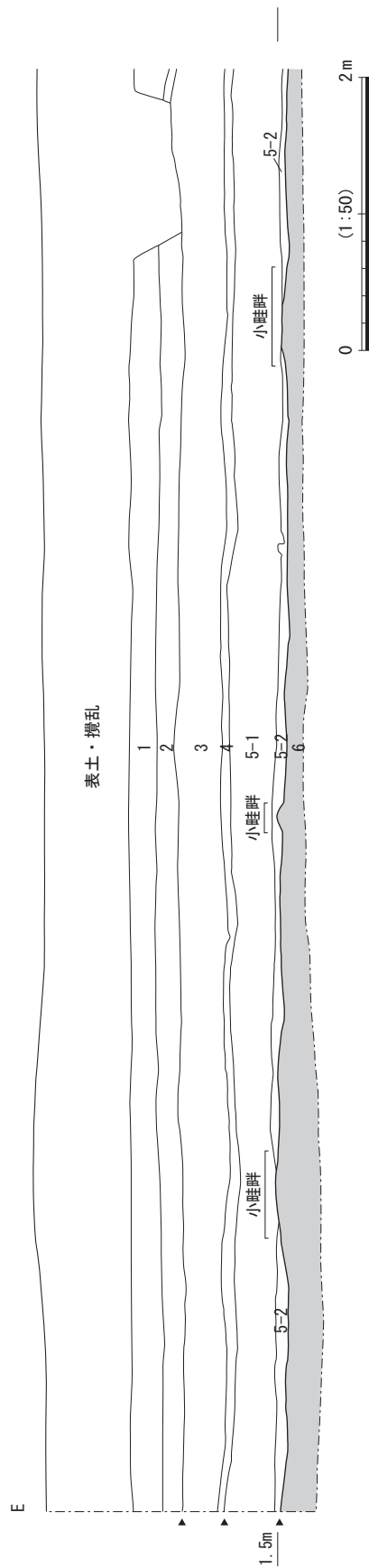


第50図 A区中央西壁A-A'・東壁B-B'土層断面

- 1層 造成土とみられる。上面は標高 2.5 ～ 2.6m、厚さ 20 ～ 30cm 程度である。近世以降に形成されたと考えられる。
- 2層 明緑灰色 7.5Y7/1 のシルトで、上面は標高 2.4m、厚さ 10 ～ 20cm 程度である。近世以降の水田耕作土と考えられる。
- 3層 浅黄色 5Y7/4 の砂層で、上面は標高 2.2 ～ 2.3m、厚さ 30 ～ 40cm 程度である。近世以降に形成されたと考えられる。3層上面を第1遺構面とした。
- 4層 褐灰色 7.5YR4/1 の粘土で、マンガンを含む。上面は標高 1.9m、厚さ 5 ～ 15cm 程度である。既往調査の「黒褐色土」に相当し、弥生時代前期末・中期初頭～中世の土壌化層であることがわかっている（中村 2000a）。
- 5層 黄橙色 7.5YR7/8 の砂層で、マンガンを含む。上面は標高 1.8m、厚さ 25 ～ 40cm 程度である。下層がグライ化し分層できる場合は、上層を 5-1 層、グライ化した下層を 5-2 層とする。5-2 層はオリーブ灰色 5GY6/1 の砂層で、マンガンを含む。上面は標高 1.5m 付近、厚さ 10 ～ 20cm 程度である。既往調査の「黄褐色細砂層」に相当し、弥生時代前期中葉～前期末・中期初頭の洪水起源砂層であることが明らかにされている（中村 2000a）。5層上面を第2遺構面とした。
- 6層 オリーブ黒色 10Y3/1 の粘土である。既往調査の「暗褐色粘質土層」に相当し、その上面では突帯文・遠賀川併行期～弥生時代前期中葉の遺構が検出される（中村 2000a）。本調査地点では水田畦畔が検出された。畦畔上面が標高 1.5m、水田面の上面は標高 1.4m、厚さ 15 ～ 35cm 程度である。B区西壁 C-C' 土層断面（第51図）では、畦畔の盛土と考えられる部分が分層でき、これを 6'

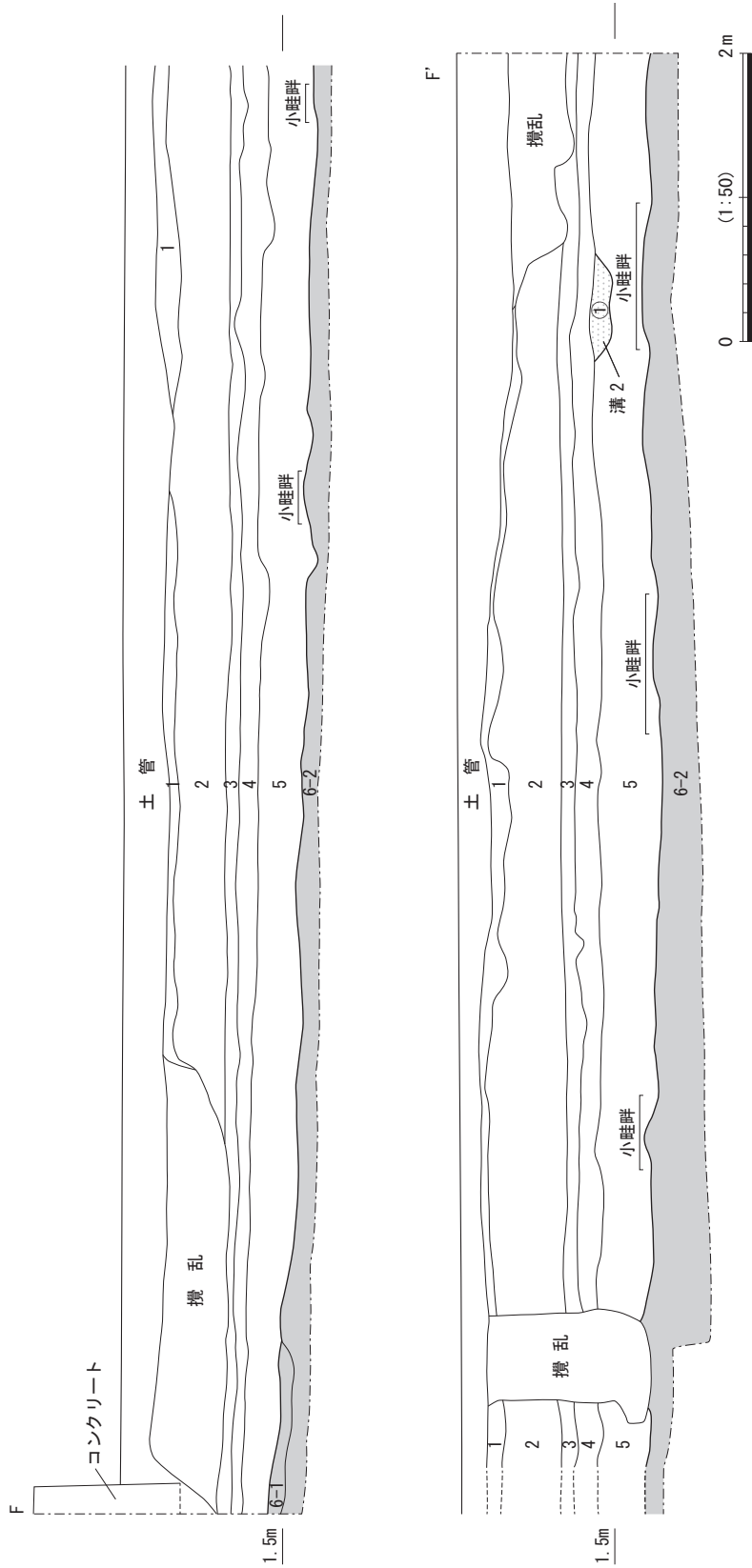


第51図 B区西壁C-C'・東壁D-D'土層断面



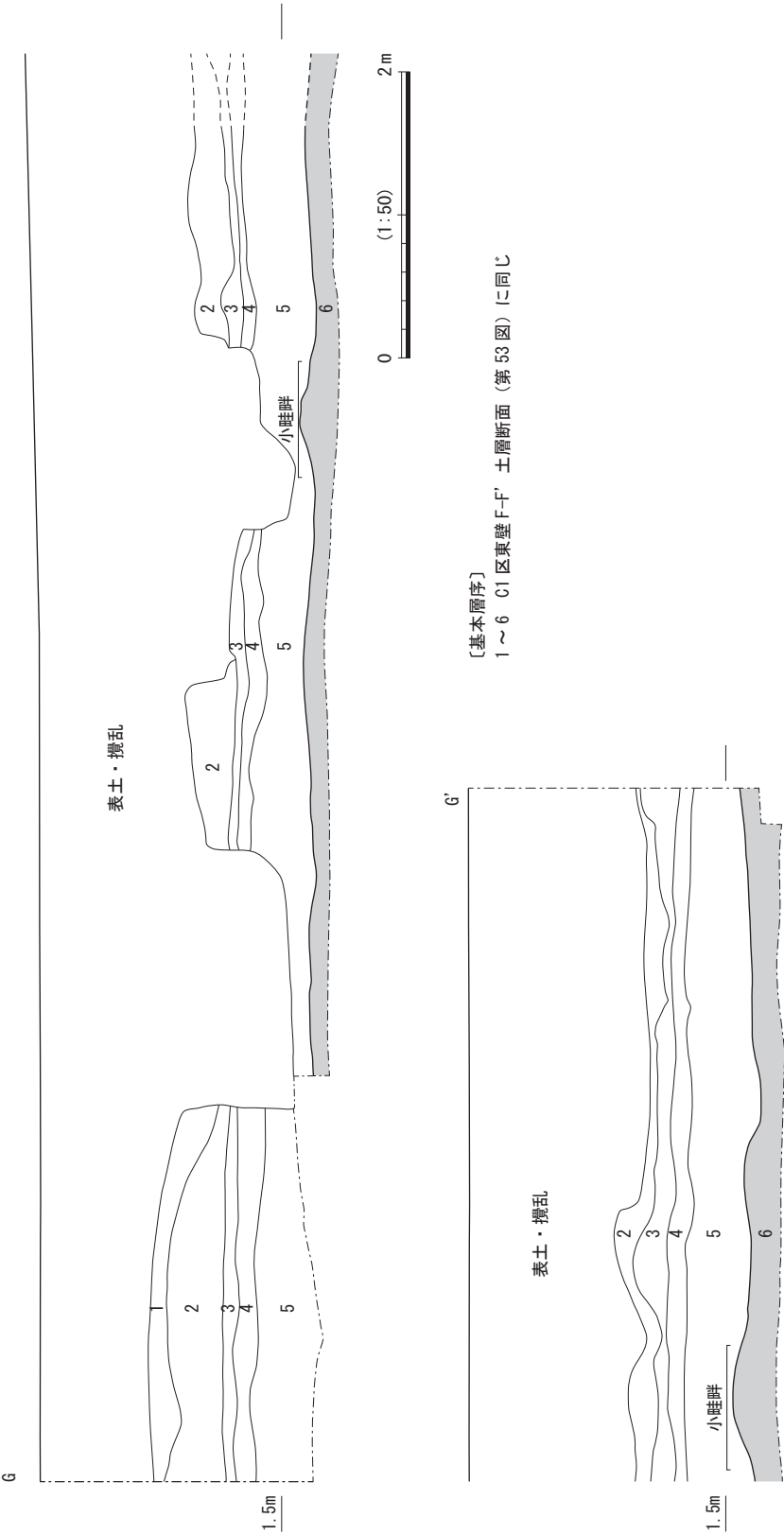
第52図 B区南壁E-E'土層断面





- 〔基本層序〕
- 1 造成土
  - 2 明緑灰色 7.5GY, シルト
  - 3 浅黄色 5Y7/4, 粘土
  - 4 褐灰色 7.5YR4/1, 粘土, Mn 少量含む
  - 5 黄橙色 7.5YR7/8, 砂, Mn 含む, 洪水起源砂層
- 6-1 暗褐色 10YR3/3, 粘土, 土壌化, 一部攪拌
- 6-2 オリーブ黒色 10Y3/1, 粘土, 水田耕作土
- 〔溝 2〕
- ① オリーブ黒色 5Y3/1, 粘土, Mn 多量に含む, やや締まる

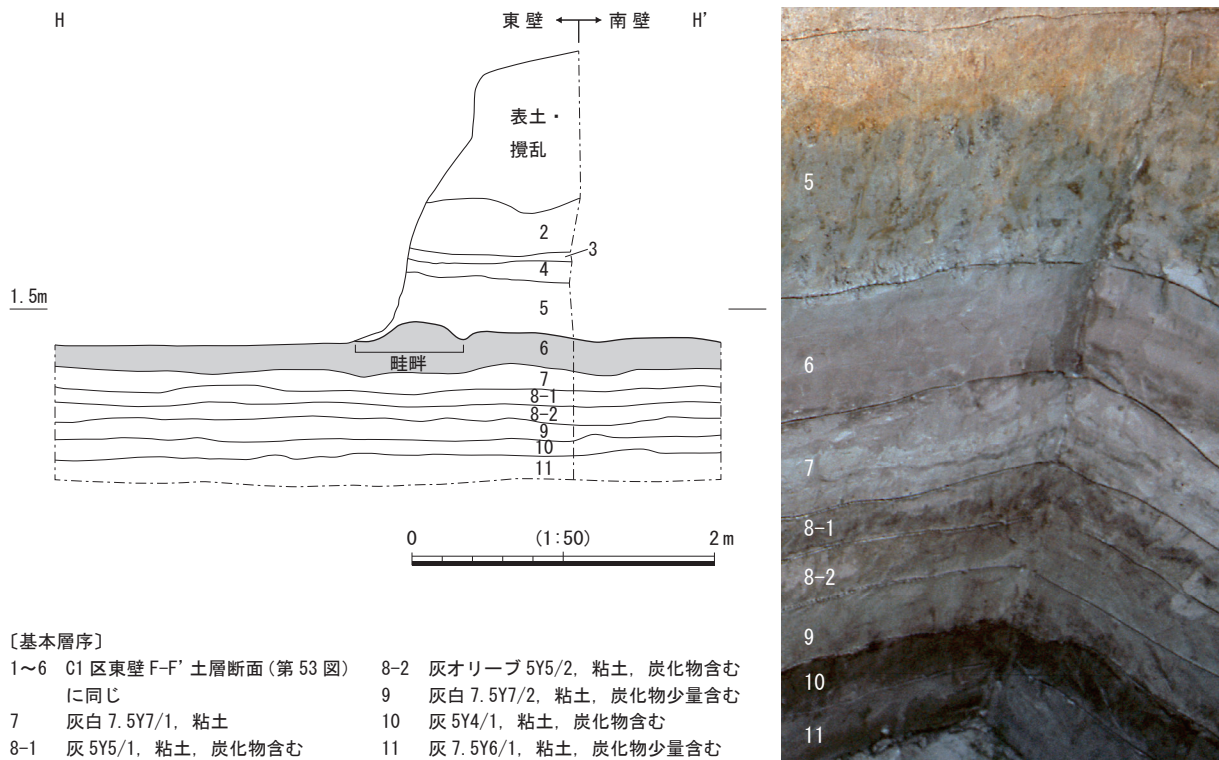
第53図 C1区東壁 F-F' 土層断面



〔基本層序〕  
1～6 C1区東壁F-F'土層断面(第53図)に同じ

第54図 C1区南壁G-G'土層断面





第55図 C1区サブトレンチ東壁・南壁 H-H' 土層断面

層とした。6'層はオリーブ褐色 2.5Y4/3 の粘土で鉄分・マンガンを含む。C1区東壁 F-F' 土層断面(第53図)では、6層は2層にわかれる。上層の6-1層は暗褐色 10YR3/3 の粘土で、土壌化し一部攪拌される。下層の6-2層はオリーブ黒色 10Y3/1 の粘土である。

なお、水田が形成されないC2区の自然落ち込み付近では、6層の様相がやや異なる(第65図)。上層を6-3層と下層を6-4層としたが、基本的に同質である。6-3層は明青灰色 5B7/1 の粘土でグライ化し、炭化物含む。6-4層は暗青灰色 5B4/1 の粘土で、6-3層に比べ細片の炭化物を含む。6層上面を第3遺構面とした。

**7層** C1区サブトレンチ(第55図)では、灰白色 7.5Y7/1 の粘土で、上面は1.1m、厚さ10～20cm程度である。なお、A区中央西壁 A-A'・東壁 B-B' (第50図)やB区西壁 C-C' (第51図)ではやや色調が暗い部分もみられる。

**8層** 土色によって2層に分層できる部分がある。上層の8-1層は灰 5Y5/1 の粘土で炭化物を含む。上面は標高1.0m、厚さ10～15cm程度である。8-2層は灰オリーブ 5Y5/2 の粘土で、炭化物を含む。上面は標高0.9m、厚さ10～15cm程度である。

**9層** 灰白 7.5Y7/2 の粘土で、炭化物を少量含む。上面は標高0.8m、厚さ10～20cm程度である。

**10層** 灰 5Y4/1 の粘土で、炭化物を含む。上面は標高0.6～0.7m、厚さ10～15cm程度である。

**11層** 灰 7.5Y6/1 の粘土、炭化物を少量含む。上面は標高0.5～0.6m、厚さ20cm以上である。

## 2. 第3遺構面の遺構と遺物

### (1) 水田

弥生時代前期中葉～前期末・中期中頭の洪水に起源する黄褐色細砂層（5層）によって覆われた、暗褐色粘質土層（6層）の上面から水田畦畔が検出された。水田域周辺の地形をみると、調査地点北西のA区（第56・57図）では、標高1.8m前後の微高地から南に向かって落ち込む谷状地形が形成される。もっとも低いところで標高1.5m前後である。微高地や谷状地形では水田は検出されていない。調査地点東半のC1・2区（第59・60・62図）では北から南に向かって標高が低くなる傾向がみられる。標高が高い北隅付近では水田が確認されておらず、水田域の北限を示すものと考えられる。また、C2区南東隅で自然落ち込みが確認されている。もっとも低い部分で標高0.3m前後である。この範囲から水田は検出されていないため、水田の南東限を示す可能性がある。なお、調査地点全体では北西から南東へ標高が低くなる傾向がみられる。

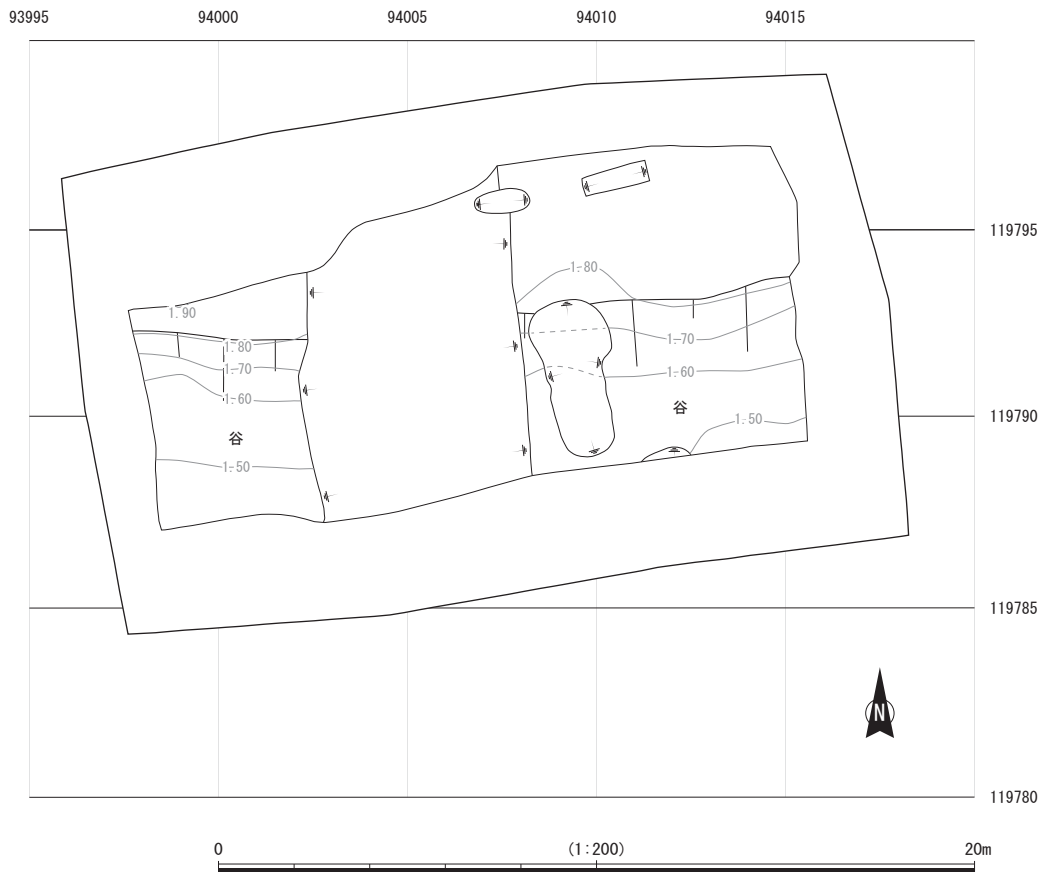
土層の堆積状況などの条件によって、すべての畦畔が検出できたわけではないが、東西75m、南北50mの範囲に70枚程度の水田面が検出された。とくに、B区（第58・61図）西側3分の2の範囲では、畦畔を明瞭に検出できたため、この部分について検討する。これらは小区画水田に分類され、各区画の形態は、東西を長辺にした長方形のものが多く、正方形に近いものもわずかにみられる。規模は、一辺1.5～7.0m程度、面積は4～25㎡程度で10㎡前後のものが中心となる。

畦畔は小畦畔と大畦畔に区分できる可能性が高い。大畦畔はB区中央付近を東西にのびる（第58図の網掛け部）。一方、C1区南半は土層の堆積状況により畦畔の検出が困難であったため、C1区南半を東西にのびる畦畔が、B区の大畦畔と連続するかは不明瞭である。なお、B区の大畦畔は、本調査地点西側の第24次調査北区で確認された大畦畔（第2章）とつながる可能性がある。大畦畔の規模は、上端幅50～120cm程度、下端幅110～170cm程度、高さ数～15cm程度である。小畦畔の規模は、上端幅15～80cm程度、下端幅30～100cm程度、高さ数～15cm程度である。明確な水口は確認されないことから、「小畦畔の上を水がオーバーフローして順次隣の田へ移っていく方法」（工楽1991、78頁）が採用されていたことを暗示する。もしそうであれば、本調査地点では、北西から南東方向に、小畦畔の上をオーバーフローさせながら水を流していたことが想定される。

C2区北西隅付近で、水田耕作土（6層）上面に、3×1m程度の土坑状の窪みが複数みられ、掘り返されたような痕跡が残る（第63図－6・7）。形成要因は不明である。水田の造成や耕作に伴うものであろうか。なお、土坑・ピット4～6（第60図）の本来の掘り込み面は、後述のように5層以上と考えられることから、土坑状の窪みとは無関係である。

**出土遺物**（第63図－5、第64図、図版5） 水田の時期を検討する手がかりとなる、水田耕作土中（6層）と水田面直上もしくはやや浮いた位置、つまり水田面を覆う弥生時代前期中葉～前期末・中期中頭の洪水起源砂層（5層）の最下層・下半で出土した遺物を以下にあげる。

1は緑色岩製の粗製剥片石器である。調査地点側溝掘削時に出土し検出層位は水田耕作土中（6層）下部もしくは7層に相当する（第63図－5）。刃部の両面に光沢がみられる。図面の網掛け部は、肉眼観察により光沢がみられる範囲を示す。



第 56 図 A 区第3遺構面平面図



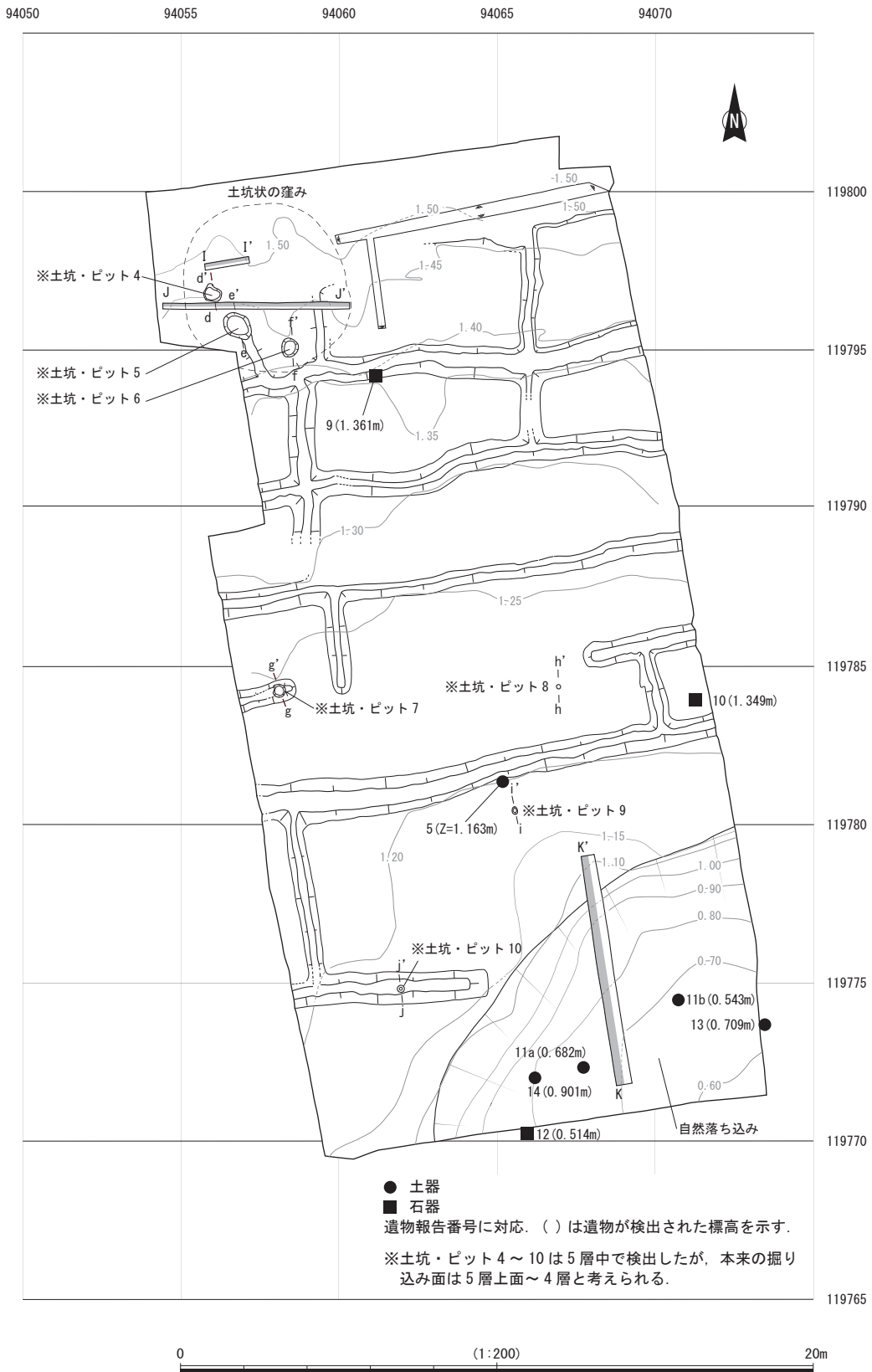
第 57 図 A 区第3遺構面全景（西から）



第58図 B区第3遺構面平面図



第 59 図 C1 区第 3 遺構面平面図



第60図 C2区第3遺構面平面図





第 61 図 B 区第 3 遺構面全景（西から）



第 62 図 C1・2 区第 3 遺構面全景（南から）





1. 大畦畔検出状況 (B区西半, 北東から)



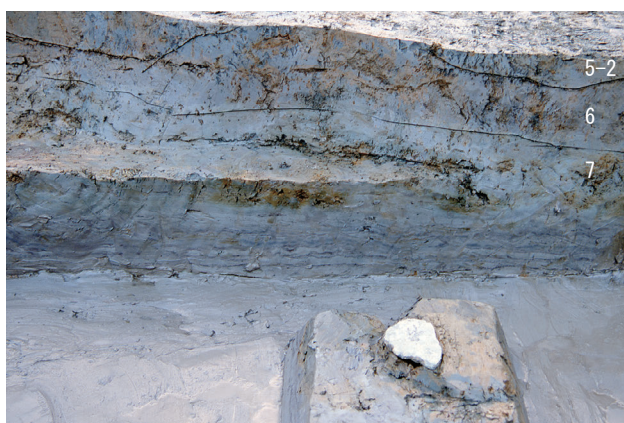
2. 水田面完掘状況 (B区西半, 南東から)



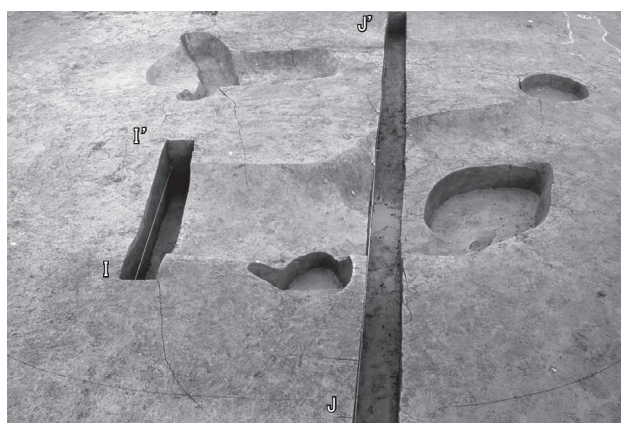
3. 大畦畔 (B区西壁 C-C' 土層断面)



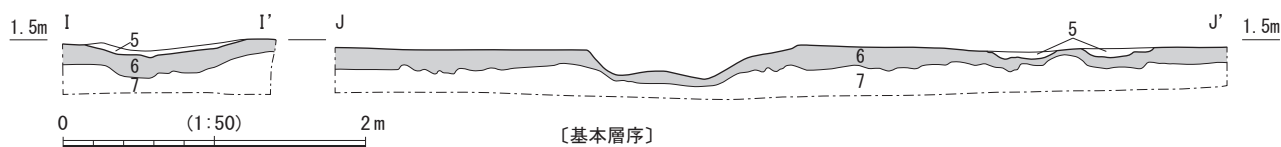
4. 小畦畔 (B区西壁 C-C' 土層断面)



5. 粗製剥片石器 (I) 出土状況 (B区東壁 D-D' 土層断面)



6. 土坑状の窪み (C2区, 西から)

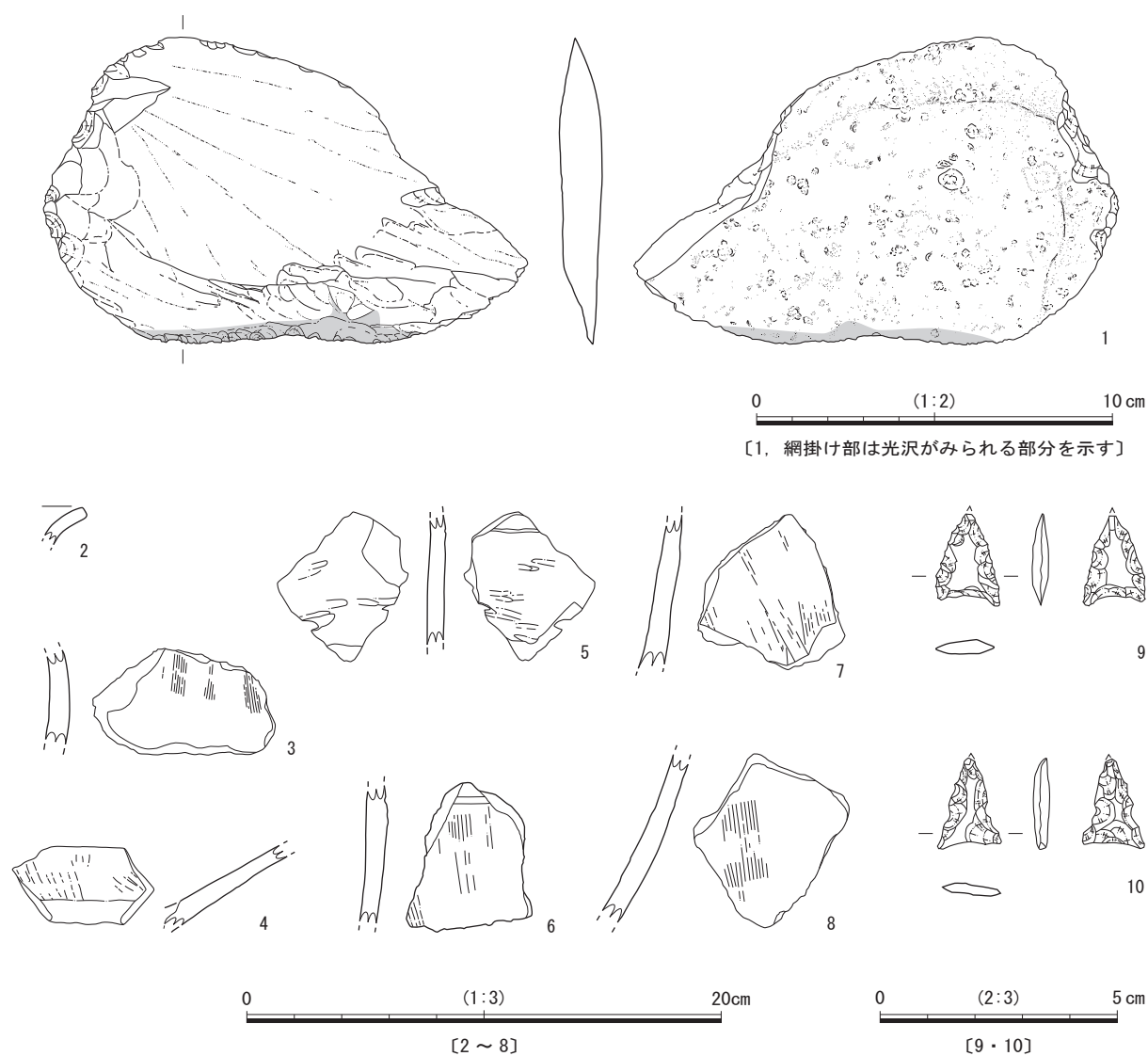


〔基本層序〕

- 5 浅黄橙色 10YR8/3, 砂, Fe 含む, 洪水起源砂層
- 6 黒褐色 10YR3/1, 粘質シルト, やや粘性高い, 攪拌土壌含む, 水田耕作土
- 7 暗青灰色 5B4/1, 粘土, Fe・Mn 含む, 土壌化

7. 土坑状の窪み I-I'・J-J' 土層断面

第 63 図 水田畦畔検出状況・遺物出土状況、土坑状の窪み I-I'・J-J' 土層断面



番号	器種	最大長 [cm]	最大幅 [cm]	最大厚 [cm]	重量 [g]	石材	備考	調査 区	遺構	層位
1	粗製剥片石器	8.6	13.6	1.3	166.5	綠色岩	刃部両面に光沢	B	包含層	6・7層
9	打製石鏃	1.9	1.3	3.0	0.63	サヌカイト	凹基式	C2	包含層	5層下半
10	打製石鏃	1.9	1.3	2.5	0.61	サヌカイト	凹基式	C2	包含層	5層下半

番号	器種	法量 [cm], ( ) は復元径			文様	器面調整 (外／内)	色調 (外／内)	備考	調査 区	遺構	層位
		口径	底径	器高							
2	弥生土器・ —	—	—	—		ナデ／ナデ	明赤褐5YR5/6／ にぶい橙7.5YR6/4		B	包含層	5層下半
3	弥生土器・ 壺?	—	—	—		刷毛目／—	灰黄褐10YR5/2／ 褐7.5YR4/4		B	包含層	5層下半
4	弥生土器・ 壺?	—	—	—		—／刷毛目	褐灰10YR5/1／ 灰黄褐10YR5/2	幅広粘土帯-外 傾接合	B	包含層	5層下半
5	弥生土器・ 甕?	—	—	—	篋描沈線 文1条	ミガキ, ナデ/ ミガキ, ナデ	灰黄2.5Y7/2／ 黄灰2.5YR4/1		C2	包含層	5層下半
6	弥生土器・ 甕	—	—	—	篋描沈線 文1条	—／刷毛目, ナデ	橙5YR6/6／ 橙5YR7/6		B	包含層	5層下半
7	弥生土器・ —	—	—	—		刷毛目, ナデ／—	灰褐7.5YR5/2／ 灰褐7.5YR5/2		B	包含層	5層下半
8	弥生土器・ —	—	—	—		刷毛目, ナデ／—	橙5YR6/6／ にぶい橙5YR7/4		B	包含層	5層下半

第 64 図 水田出土遺物



2～10は水田面の直上もしくはやや浮いた位置（5層最下部・下半）から出土した遺物である。

2～8は土器である。2は口縁部である。3は壺の胴部であろうか。外面に刷毛目調整が残る。4は壺の底部と考えられる。粘土帯の接合痕が観察され、幅広粘土帯－外傾接合（三阪 2014）の可能性が高い。内面に刷毛目調整がみられる。5は胴部片である。篋描沈線文が1条残る。外面・内面に横方向のミガキ調整がみられる。6は甕胴部上半と考えられる。篋描沈線文が1条残る。外面には縦方向の刷毛目調整がみられる。7・8は胴部で、外面に刷毛目調整がみられる。

9・10はサヌカイト製の凹基式の打製石鏃である。

**時期** 庄・蔵本遺跡の層序とその形成時期については、中村豊（2000a）によって整理され、その後も資料が蓄積されている。これらを参照すると、洪水起源砂層である本調査地点5層の形成は、弥生時代前期中葉～前期末・中期初頭と考えられる。

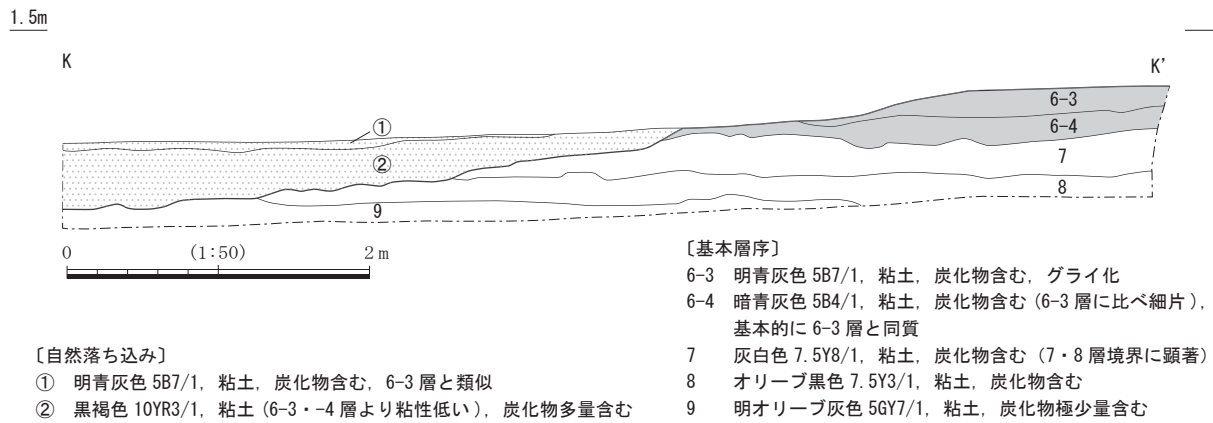
本調査地点では、この洪水起源砂層（5層）を除去した暗褐色粘質土層（6層）上面から水田が検出された。本調査地点の南に隣接する第17次調査（中央診療棟新営）地点でも同様に、洪水起源砂層を除去した暗褐色粘質土層上面から水田面が検出されており、出土遺物の検討を通じ、水田の時期は弥生時代前期中葉に位置づけられている（中村 2000b）。本調査地点で検出された水田も検出層位からみて、第17次調査の水田と同様、弥生時代前期中葉に位置づけられる可能性が高いといえる。

本調査地点における出土遺物の時期について検討すると、水田耕作土（6層）あるいはその下層（7層）から出土した粗製剥片石器（1）は、縄文時代晩期～弥生時代前期末・中期初頭（I-3・4様式）の範囲におさまると考えられる。また、水田面直上あるいはやや浮いた位置から出土した土器は、篋描沈線文が施されるものが含まれ（5・6）、突帯文・遠賀川併行期（I-1様式）～弥生時代前期末・中期初頭の時期幅におさまる。打製石鏃（9・10）は凹基式で重量が0.6g程度であり、縄文時代晩期～弥生時代前期に量的なピークがある（寺前 2010）。本調査地点の水田の所属時期について、出土遺物から詳細な時期を絞り込むことは難しいが、上述の層位学的な所見や周囲の調査地点の水田の時期をふまえると、弥生時代前期中葉（I-2様式）であるとの見方に矛盾しない。

## (2) 自然落ち込み（第60・65図）

自然落ち込みはC2区南東隅で検出された。土層断面・検出状況・遺物出土状況を第65図に示している。検出された層位は、水田面と同じ6層上面である。平面規模は残存部分で、東西10.6m、南北8.5m程度である。5層を除去した段階では、上端から緩やかに標高が低くなる状況が確認され、上端の標高1.1m前後、下端の標高0.6m前後、深さ0.5m前後であった。第60図の自然落ち込み部分については、この段階の等高線を記録したものである。

さらに、自然落ち込み中央に南北方向のサブトレンチを設定し、土層断面K-K'（第65図）を観察したところ、南半でさらに一段下がる部分が検出された。最も低い南端で標高0.3m前後である。そこには基本層序6-3・4層と似た埋土が2層堆積している状況が確認された。上層の1層は明青灰色5B7/1の粘土で炭化物を含む。6-3層と類似する土質である。下層の2層は黒褐色10YR3/1の粘土で



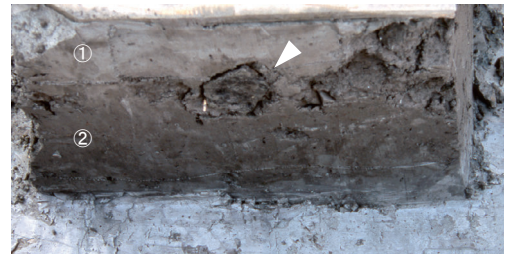
1. 自然落ち込み K-K' 土層断面



2. 自然落ち込み K-K' 土層断面南半（北西から）



3. 自然落ち込み平面（北西から）

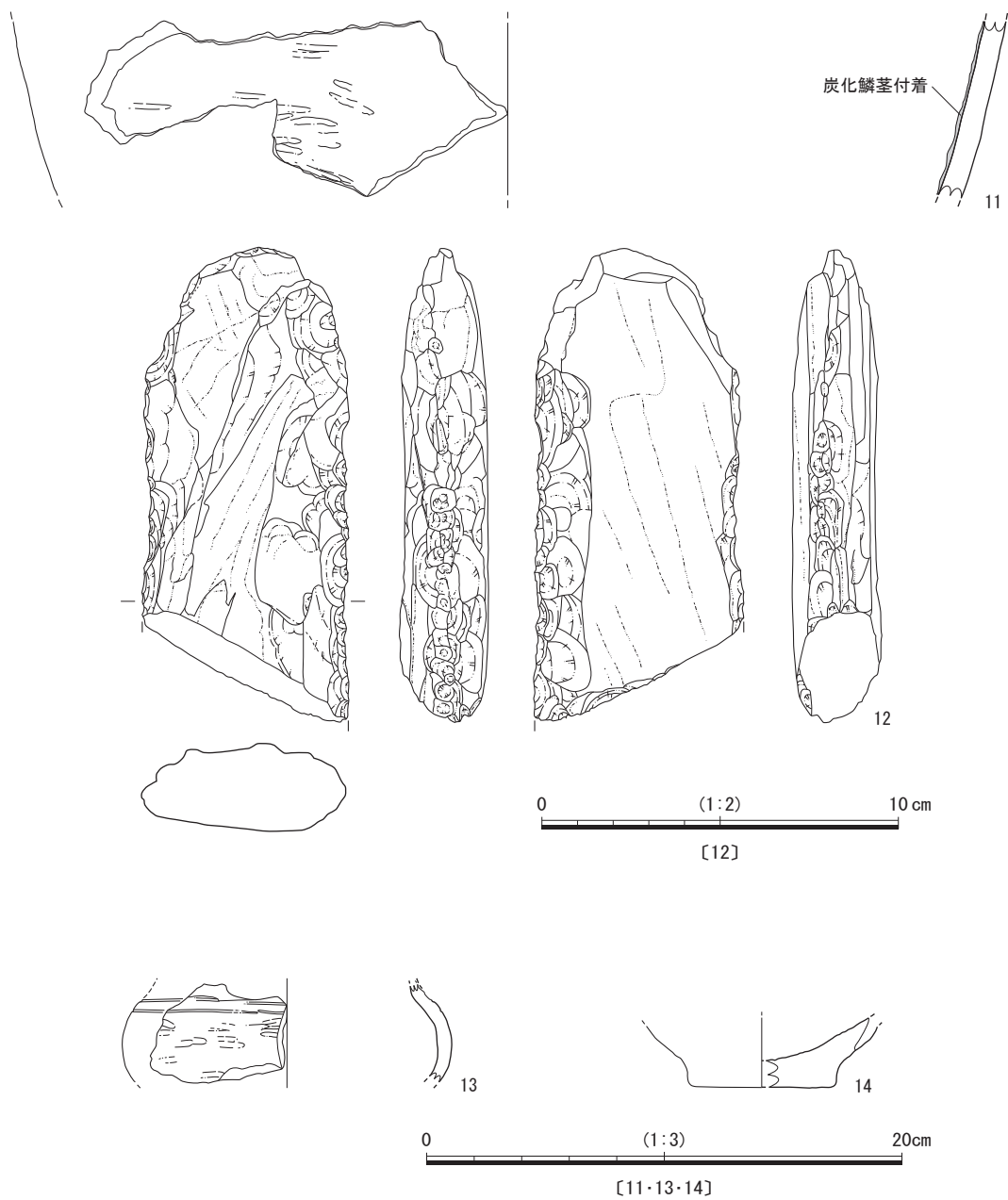


4. 炭化鱗茎付着土器 (11a) 出土状況（東から）



5. 打製石斧 (12) 出土状況（北から）

第 65 図 自然落ち込み



番号	器種	法量〔cm〕, ( ) は復元径			文様	器面調整 (外／内)	色調 (外／内)	備考	調査区	遺構	層位
		口径	底径	器高							
11	弥生土器・壺?	—	—	—		ミガキ／—	灰黄褐10YR6/2／不明	内面に炭化鱗茎付着	C2	自然落ち込み	2層
13	弥生土器・壺	—	—	—	篋描沈線文2条以上	ミガキ／ユビオサエ, ナデ	黒褐10YR3/1／灰黄褐10YR5/2	黒色化, 幅広粘土帯-外傾接合	C2	自然落ち込み	1層
14	弥生土器・—	—	(6.2)	—		ナデ／—	褐灰10YR4/1／黄灰2.5Y6/1	幅広粘土帯-外傾接合	C2	自然落ち込み	1層
番号	器種	最大長〔cm〕	最大幅〔cm〕	最大厚〔cm〕	重量〔g〕	石材	備考		調査区	遺構	層位
12	打製石斧	13.3	5.8	2.5	282.4	緑色岩			C2	自然落ち込み	2層

第 66 図 自然落ち込み出土遺物



6-3・4層より粘性が低く、炭化物を多量に含む。

**出土遺物**（第66図、図版6） 11・12は、自然落ち込み埋土2層から出土した遺物である。11は壺の胴部と考えられる。外面は横方向のミガキ調整で、胎土は粗く砂粒が多く含まれる。調整・胎土・色調などの特徴からみて、弥生時代前期の土器である可能性が高いが、時期は確定できない。ただし、後述するように下層の1層から、突帯文・遠賀川併行期～弥生時代前期中葉の土器が出土しているため、2層の時期もこれと同時期かそれ以前の可能性がある。さて、この土器の内面には炭化鱗茎（佐々木 2014）が付着し<sup>1</sup>、外面には炭化物が吹きこぼれ状に付着している。縄文時代の炭化鱗茎は報告されているが、弥生時代の事例は初とされる。弥生時代前期の摂取食物を知るうえで、きわめて重要な資料といえよう。12は緑色岩製の打製石斧である。刃部は欠損する。

13・14は埋土1層から出土した遺物である。13は小型の壺胴部で、頸部下に篋描沈線文が現状で2条残る。外面は横方向のミガキ調整で、黒色化した痕跡がみられる<sup>2</sup>。胴部形態や篋描沈線文が少条である点から、その時期は前期中葉（Ⅰ－2様式）、あるいは突帯文・遠賀川併行期（Ⅰ－1様式）に遡る可能性もある。14は底部である。幅広粘土帯－外傾接合（三阪 2014）がみられ、これは弥生時代前期に普遍的な技術である。また、自然落ち込みからは数点の植物種実が出土している。これと炭化鱗茎については、今後、同定および年代測定を行い別稿で報告する予定である。

**時期** 自然落ち込みの検出層位および埋土の出土遺物から検討した場合、自然落ち込みの形成時期は弥生時代前期中葉以前と考えられるが、水田機能時にどの程度落ち込みが埋没していたのかは不明である。

### 3. 第2遺構面の遺構と遺物

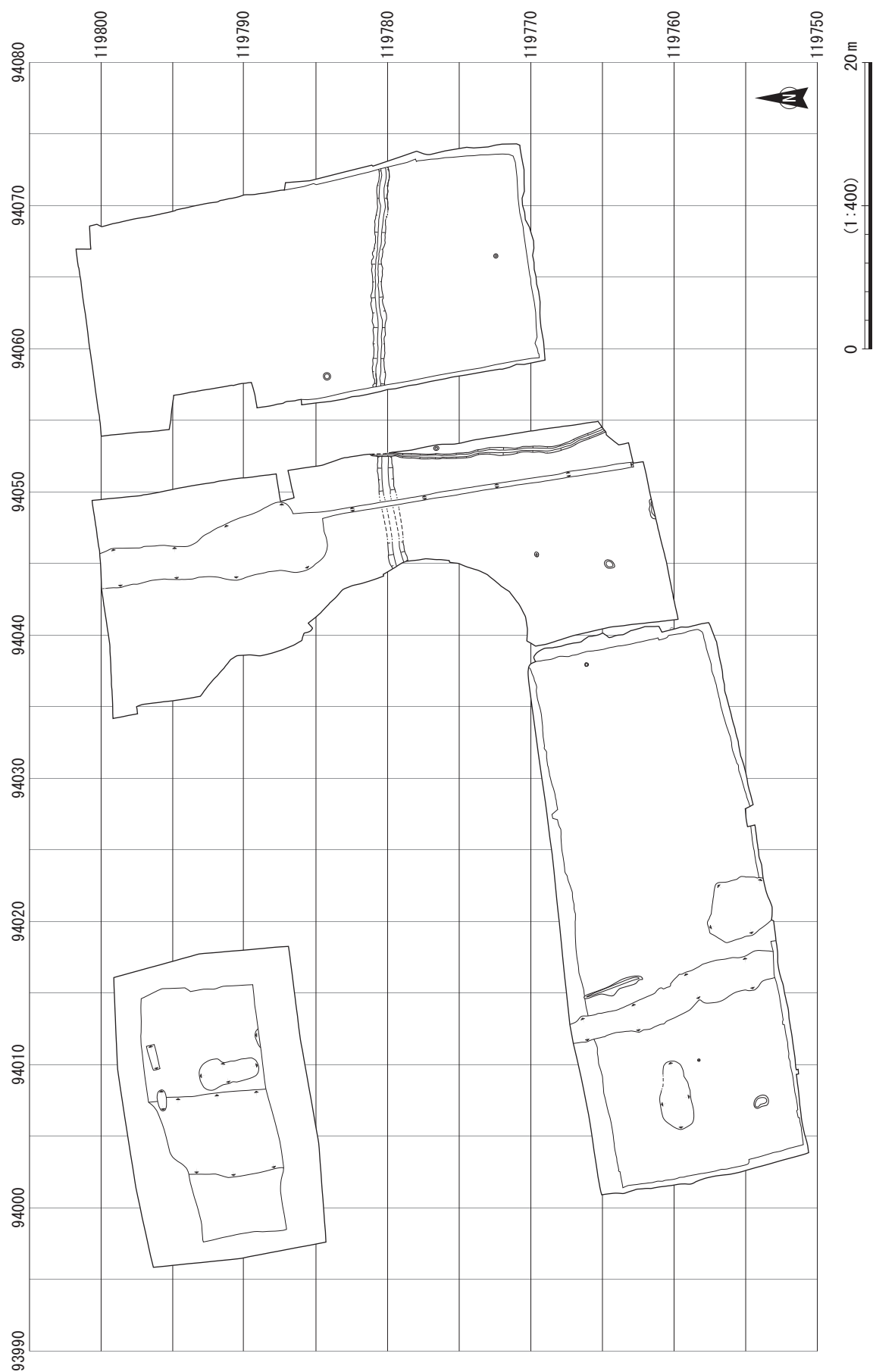
弥生時代前期中葉～前期末・中期初頭に形成された洪水起源砂層である5層の上面を第2遺構面とした。本遺構面で検出された遺構には、5層の上面から掘り込まれたものだけではなく、弥生時代前期末・中期初頭～中世の土壌化層である4層から掘り込まれ、5層に達したものも含まれる。これは4層では基盤層と遺構埋土が同質で区分が困難であり、5層上面でこれらの遺構を検出せざるをえなかったためである。

#### (1) 溝

溝1～3は5層上面で検出された。埋土はオリーブ黒色の粘土である。これらの溝からは時期が特定できる遺物が出土しておらず、層位学的な所見から弥生時代前期末・初頭～中世の一時期と考えられる。

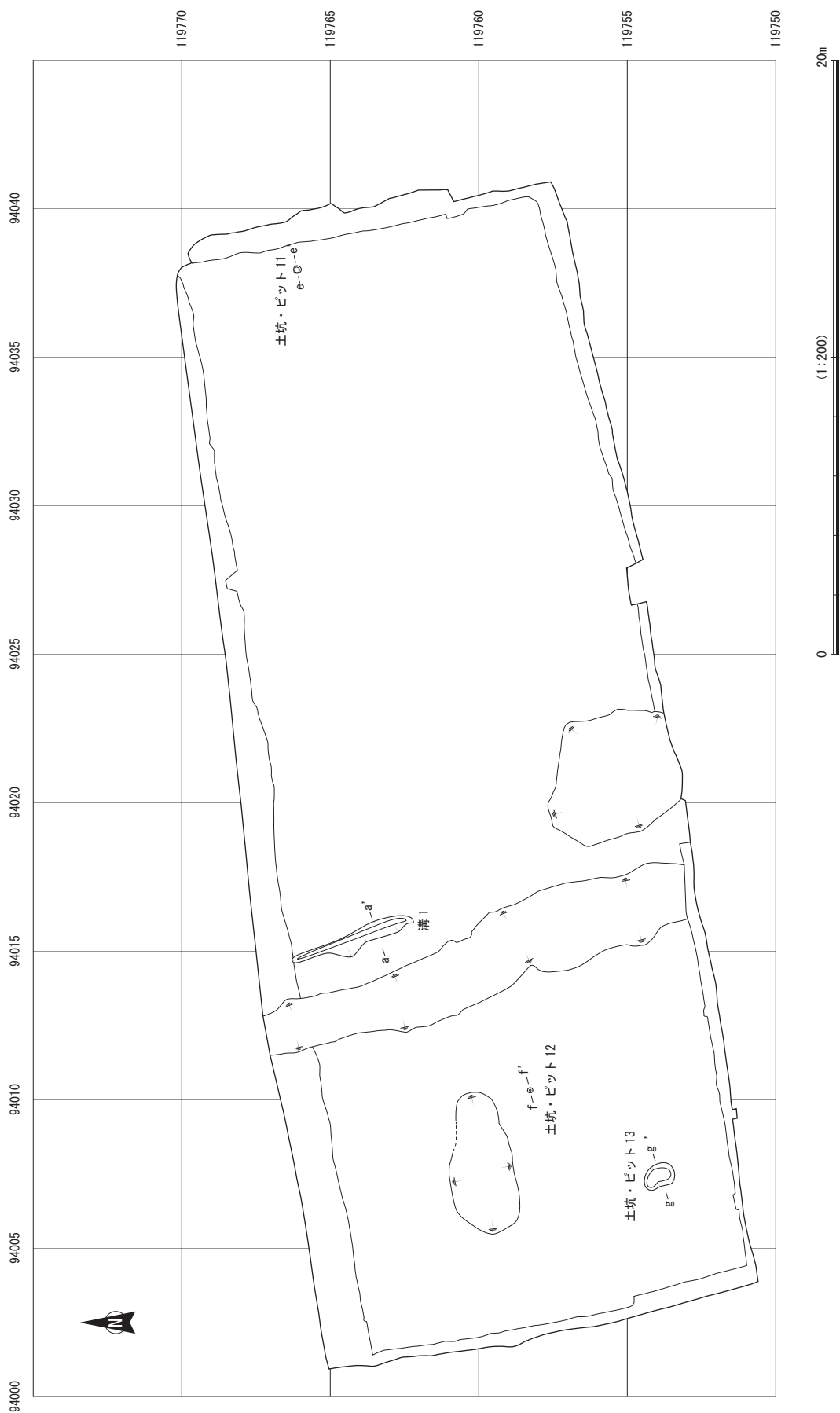
**溝1**（第68・71図） B区に位置し、南北方向にのびる。幅0.3～0.6m、長さ4.1m、深さ15cmである。断面形態は段を有しテラス状を呈する部分がみられる。

**溝2**（第53・69～71図） C1区とC2区で検出された東西方向にのびる溝である。両区の溝は連続するものとみられるため、一括し溝2と報告した。C1区では中央付近は攪乱により削平されているものの、幅1.0～1.3m、長さ7.8m、深さ5cmである。C2区は幅0.6～1.0m、長さ15.1m、深さ5cmである。溝3に切られる。



第67図 第2遺構面全体図

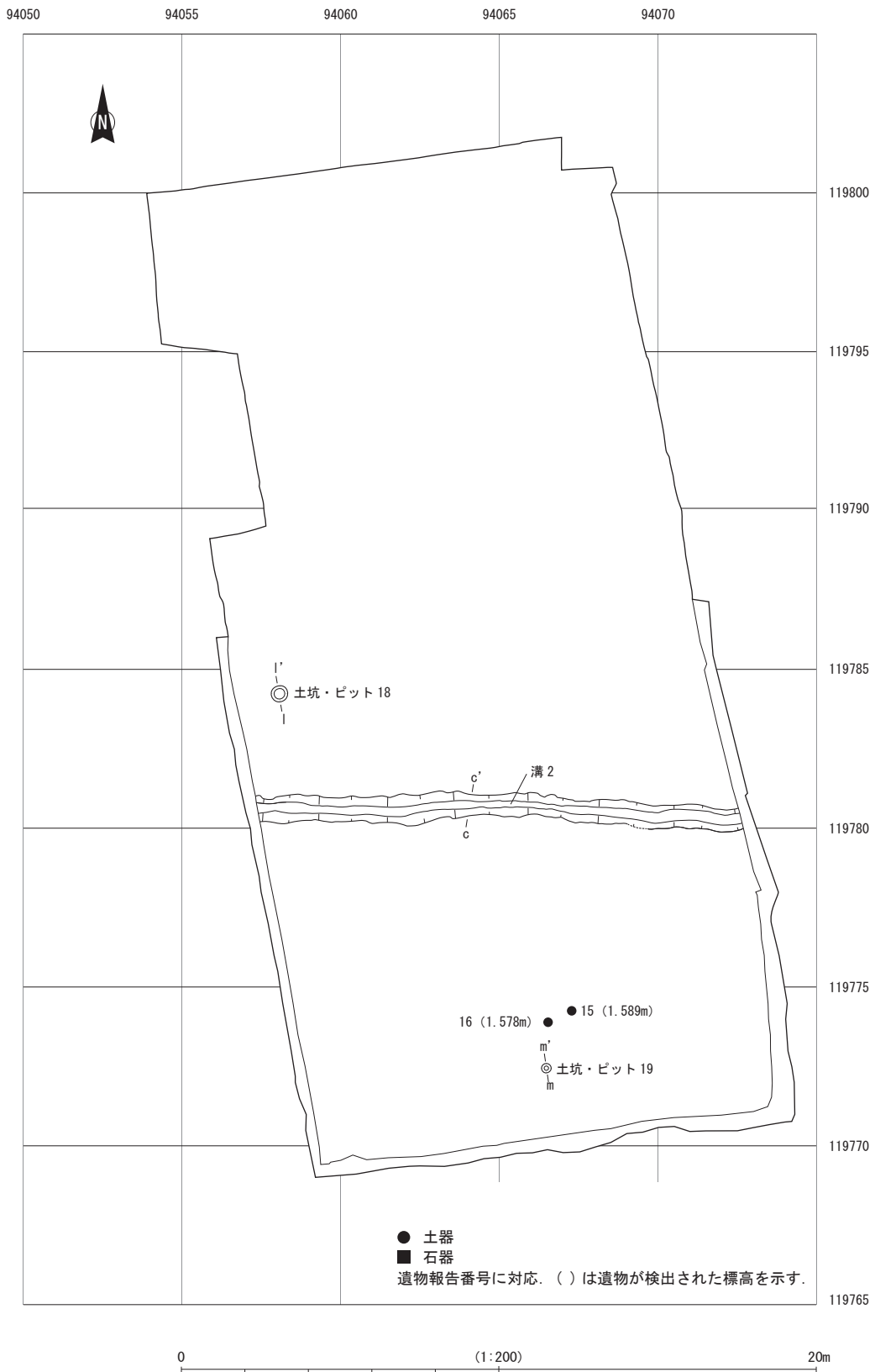




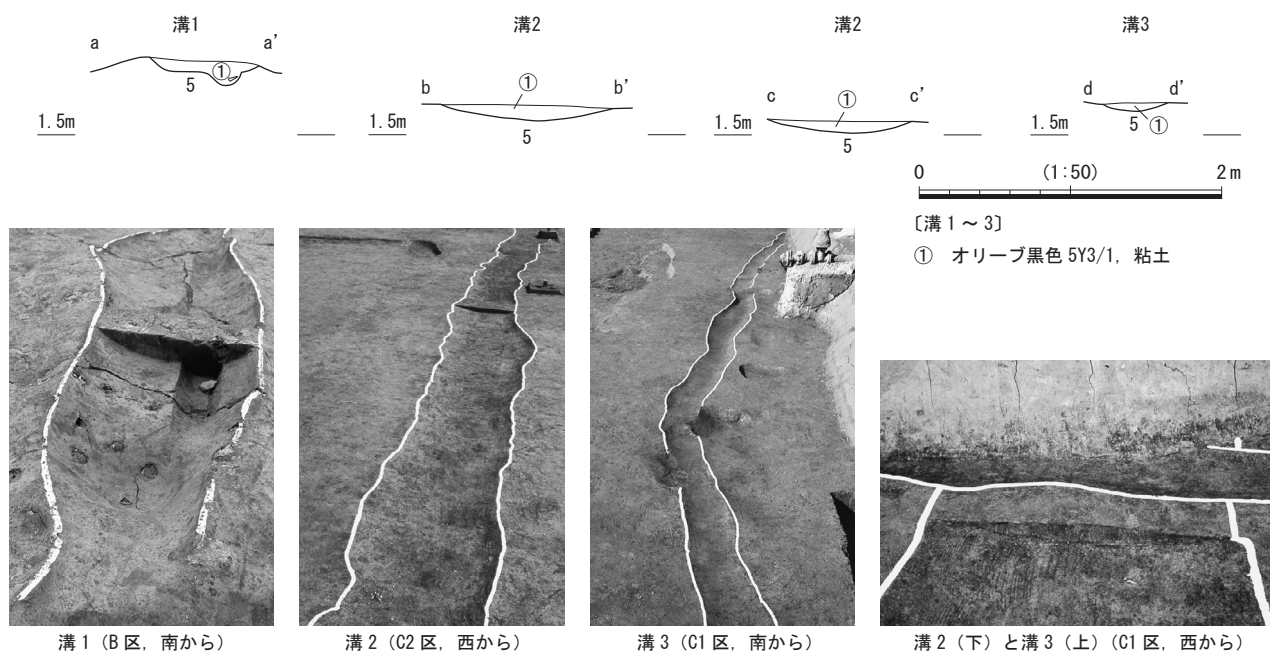
第 68 図 B 区第 2 遺構面平面図



第 69 図 C1 区第 2 遺構面平面図



第70図 C2区第2遺構面平面図



第71図 溝土層断面・完掘状況

**溝3** (第69・71図) C1区に位置し、南北方向にのびる。幅0.15～0.6m、長さ16.5m以上、深さ5cmである。溝2を切る。

## (2) 土坑・ピット

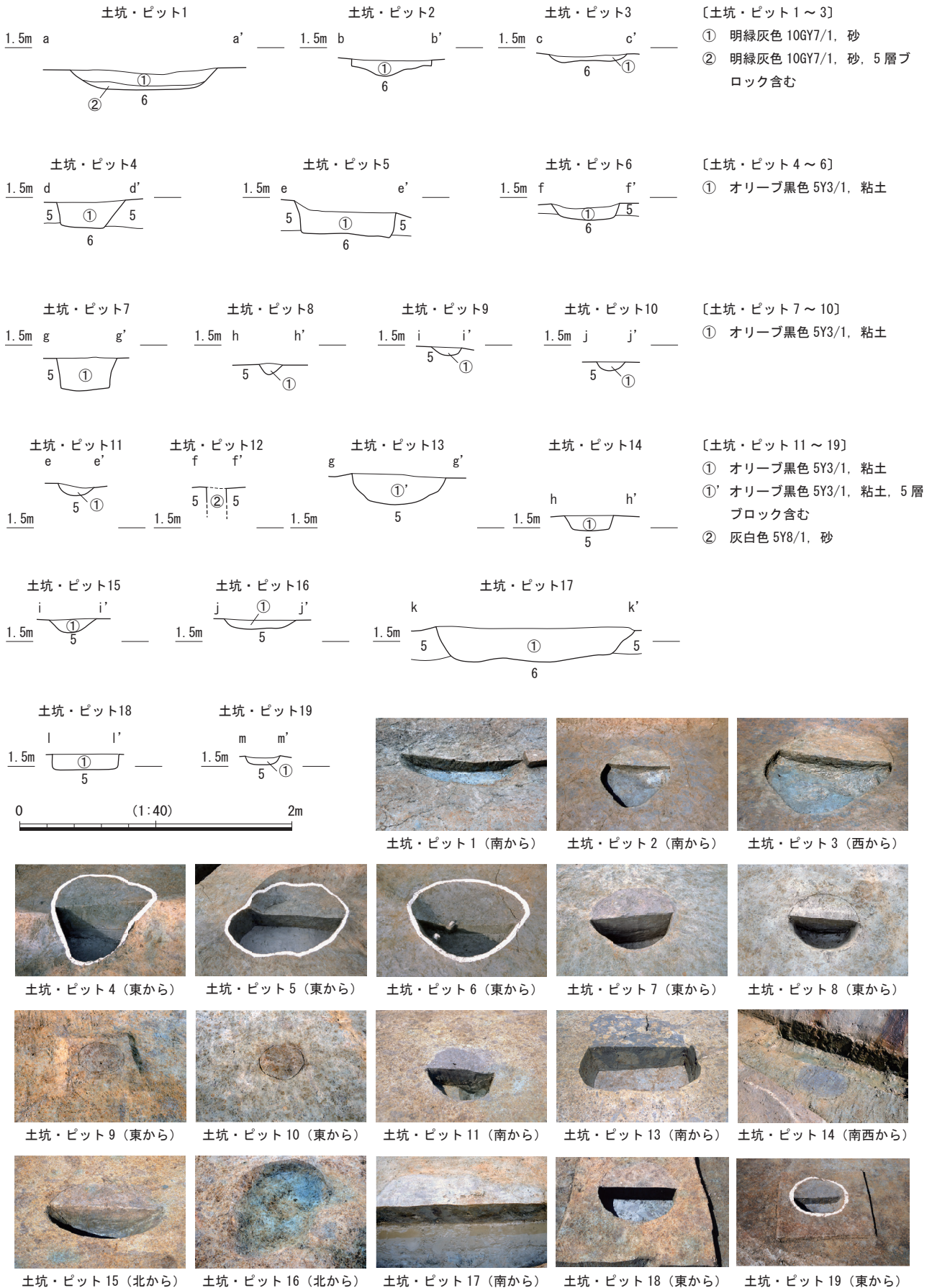
今回検出された土坑とピットは、サイズに不連続が認められず、柱痕の有無も不明確であったため、両者を一括し土坑・ピットと報告した。

洪水起源砂層である5層の上面(第2遺構面)から検出された土坑・ピット11・13～19および先述の溝1～3の埋土は、オリーブ黒色の粘土を基本とする。一方、土坑・ピット4～10は5層中で検出されたが、その埋土は5層上面から検出された遺構と同様、オリーブ黒色の粘土である。そのため、これらも本来は5層上面で検出された遺構と同様、5層上面もしくは4層から掘り込まれた可能性がある。

また、土坑・ピット1～3は6層上面から検出された。その埋土は明緑灰色の砂層であり、5層上面から検出された遺構の埋土とは異なる。ただし、土坑・ピット1の埋土下層(2層)には5層のブロックが含まれていることから、5層形成以降に埋没した可能性が高い。土坑・ピット1～3が水田面や畦畔を切っている点からも、これらの遺構の本来の掘り込み面は、5層あるいは4層の可能性が高いため、第2遺構面の遺構とあわせて報告した。

これらの土坑・ピットからは、時期が判別可能な遺物は出土していないが、層位学的な所見から弥生時代前期末・中期初頭～中世の一時期に位置づけられる。

**土坑・ピット1** (第58・72図) B区の6層上面から検出された。長径1.1m、短径0.6mの楕円形で深さ15cmである。埋土は2層に分かれ、上層(1層)・下層(2層)とも基本的に同質であるが、下層には基本層序5層のブロックが含まれる。



第72図 土坑・ピット土層断面

**土坑・ピット2**（第58・72図） B区の6層上面から検出された。長径0.8m、短径0.6mの不整楕円形で深さ10cmである。

**土坑・ピット3**（第58・72図） B区の6層上面から検出された。長径0.7m、短径0.6mの楕円形で深さ5cmである。

**土坑・ピット4**（第60・72図） C2区の5層中から検出された。長径0.6m、短径0.5mの不整楕円形で深さ20cmである。

**土坑・ピット5**（第60・72図） C2区の5層中から検出された。長径1.0m、短径0.8mの楕円形で深さ25cmである。

**土坑・ピット6**（第60・72図） C2区の5層中から検出された。長径0.6m、短径0.5mの楕円形で深さ10cmである。

**土坑・ピット7**（第60・72図） C2区の5層中より検出された。直径0.45mの不整円形で深さ25cmである。後述する土坑・ピット18は土坑・ピット7のほぼ直上に位置し、直径もわずかに大きい点から、両者は同一の遺構と考えられる。

**土坑・ピット8**（第60・72図） C2区の5層中より検出された。直径0.15mの円形で深さ10cmである。

**土坑・ピット9**（第60・72図） C2区の5層中より検出された。長径0.25m、短径0.20mの楕円形で深さ5cmである。

**土坑・ピット10**（第60・72図） C2区の5層中より検出された。直径0.25mの円形で深さ10cmである。

**土坑・ピット11**（第68・72図） B区の5層上面より検出された。直径0.2mの円形で深さ10cmである。

**土坑・ピット12**（第68・72図） B区の5層上面より検出された。直径0.2mの円形で深さ10cm以上である。埋土は灰白色5Y8/1の砂層で、5層上面で検出された他の遺構の埋土とは異なる。上層で掘り込み面を検出しえなかったが、現代のボーリング調査などの痕跡の可能性はある。

**土坑・ピット13**（第68・72図） B区の5層上面より検出された。長径1.1m、短径0.7mの不整楕円形で深さ25cmである。埋土は5層上面で検出された他の遺構同様、オリーブ黒色の粘土であるが、5層のブロックが含まれる。

**土坑・ピット14**（第69・72図） C1区の5層上面より検出された。長径0.4m、短径0.3mの楕円形で深さ10cmである。

**土坑・ピット15**（第69・72図） C1区の5層上面より検出された。長径0.4m、短径0.3mの楕円形で深さ10cmである。

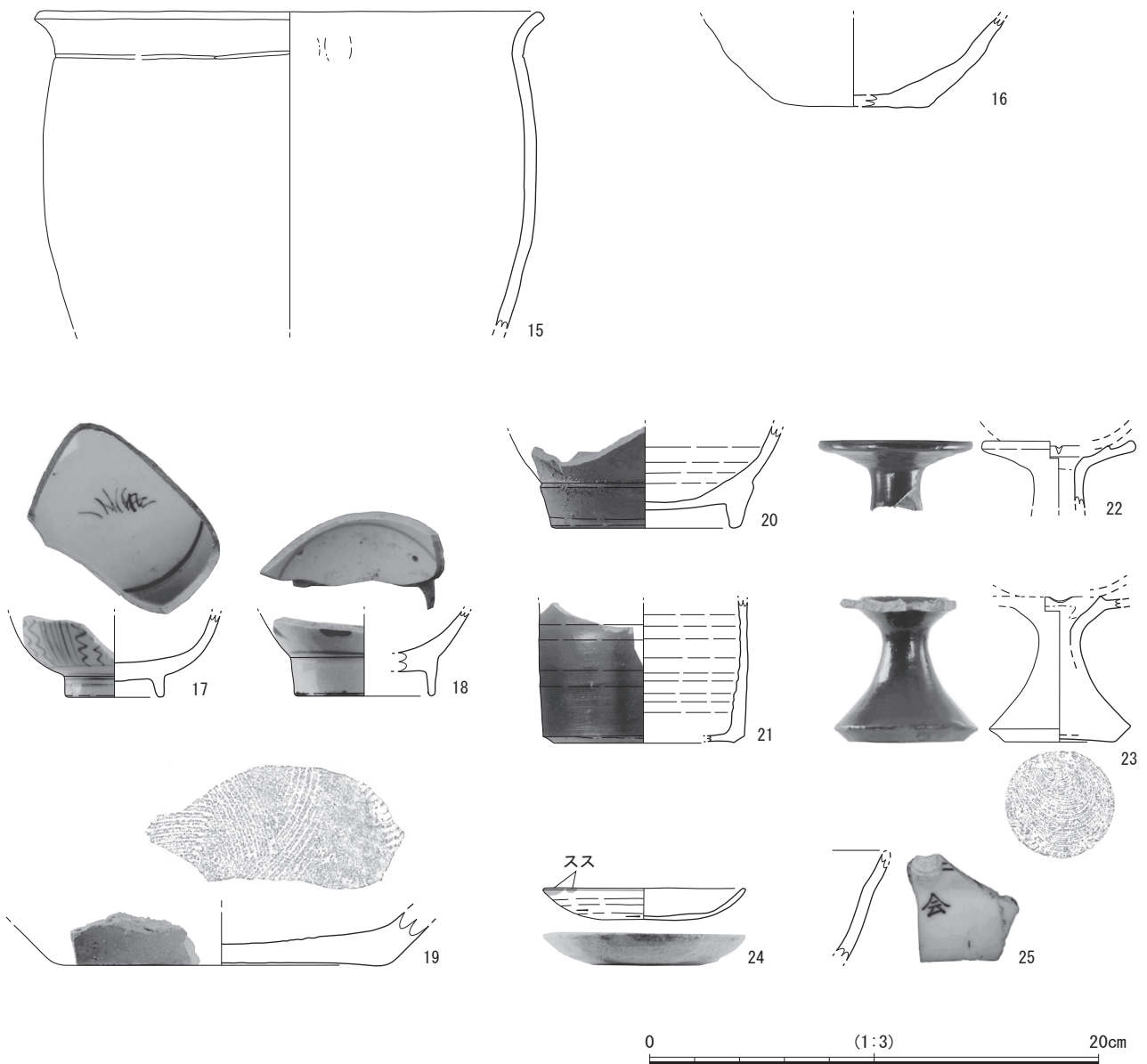
**土坑・ピット16**（第69・72図） C1区の5層上面より検出された。長径0.8m、短径0.6mの楕円形で深さ10cmである。

**土坑・ピット17**（第69・72図） C1区の5層上面より検出された。長径1.4m、短径0.2m以上の不整楕円形で深さ25cmである。

**土坑・ピット18**（第70・72図） C2区の5層上面より検出された。直径0.5mの円形で深さ10cmである。前述のように、土坑・ピット18と7は同一の遺構である可能性が高い。

**土坑・ピット19**（第70・72図） C2区の5層上面より検出された。直径0.3mの円形で深さ5cmである。





第73図 包含層・攪乱出土遺物

#### 4. 包含層・攪乱出土遺物（第73図、第4表、図版6）

**4・5層** 15・16は弥生土器である。15は甕である。頸部に篋描沈線文が1条施される。口唇部は平らで刻目はみられない。弥生時代前期に位置づけられる。16は底部である。器面の摩耗が著しい。  
**表土・攪乱** 17・18は肥前系磁器である。畳付のみ無釉である。17は碗で、外面と内面見込に染付により文様が施される。18は広東（形）碗である。

19は堺・明石系陶器の擂鉢である。見込のスリメは放射状を呈する。

20～23は大谷焼である。20・21は瓶あるいは徳利と考えられる。内外面とも回転ナデ調整が施される。20は碁笥底状の断面三角形の削り出し高台、21は平底もしくは若干の上げ底である。製作時期は特定できないが、大谷焼が普及した19世紀以降の所産（日下1998a）である。22・23は



第4表 包含層・攪乱出土遺物観察表

番号	器種	法量[cm], ( ) は復元径			文様	器面調整 (外/内)	色調 (外/内)	備考	調査区	遺構	層位
		口径	底径	器高							
15	弥生土器・甕	(22.3)	—	—	篋描沈線文1条	—/ユビオサエ、ナデ	にぶい黄橙10YR6/4/ にぶい橙7.5YR7/4		C2	包含層	4・5層
16	弥生土器・—	—	6.5	—		—/—	にぶい黄橙10YR6/4/ にぶい黄橙10YR6/4		C2	包含層	4・5層

番号	器種	法量[cm], ( ) は復元径			絵付	釉薬	器面調整 (外/内)	色調 (外/内)	備考	調査区	層位	層位
		口径	底径	器高								
17	肥前系磁器・碗	—	4.3	—	染付	透明	ロクロ/ロクロ		畳付砂付	A・B	表土・攪乱	—
18	肥前系磁器・広東碗	—	(6.1)	—	染付	透明	ロクロ/ロクロ		畳付砂付着	A・B	表土・攪乱	—
19	堺・明石系陶器・播鉢	—	(14.5)	—	—	鉄	ロクロ/ロクロ	にぶい赤褐2.5YR5/3/ 明赤褐2.5YR5/6		A・B	表土・攪乱	—
20	大谷焼・瓶/德利?	—	8.2	—	—	鉄	ロクロ/ロクロ	暗赤褐2.5YR3/2/ 灰赤2.5YR5/2		A・B	表土・攪乱	—
21	大谷焼・瓶/德利?	—	(8.0)	—	—	鉄	ロクロ/ロクロ	暗赤褐2.5YR3/2/ 赤10YR5/6		A・B	表土・攪乱	—
22	大谷焼・燈明具	6.6	—	—	—	鉄	ロクロ/ロクロ	暗赤褐5YR3/2/ 暗赤褐5YR3/2		A・B	表土・攪乱	—
23	大谷焼・燈明具	—	5.0	—	—	鉄	ロクロ/ロクロ、糸切り	暗赤褐2.5YR3/3/ 明赤褐2.5YR3/2		A・B	表土・攪乱	—
24	備前焼・燈明皿	8.8	4.0	1.4	—	—	回転ナデ/回転ヘラケズリ	暗赤褐2.5YR5/6/ にぶい赤褐2.5YR4/4	内面に塗土、スス付着	A・B	表土・攪乱	—
25	硬質陶器・碗	—	—	—	緑	透明	—/—		緑色で「□会」の銘	A・B	表土・攪乱	—

燈明具である。23は「断面三角形の脚部上端に受皿の付くA類」に分類される（日下2000）。燈明具は19世紀前半から20世紀初頭にみられる（日下1998a・2000）。

24は備前焼燈明皿である。器壁は1.5～2.5mmと薄い。内面全体に塗土が施される。外面全体が同心円状回転ヘラケズリ調整により、糸切り離し痕はみられない。胎土は赤または橙色で焼成が甘目である「L類」に分類され、時期は18世紀後半から19世紀初頭に位置づけられる（日下1998b）。口縁部の内外面にスス・コゲの付着が認められる。

25は硬質陶器と考えられる（田尻2013）。器種は碗で、口縁部が内湾して立ち上がる。口縁部外面に緑色の二重圈線（「グリーン2線」）を有し、その下に「□会」と記される。庄・蔵本遺跡の立体駐車場新営その他工事に伴う立会調査で形態・文様が類似する美濃窯業株式会社製の硬質陶器が採集された。そこには「厚仁□」「□仁会」と記されており、徳島大学附属病院に関連する厚仁会のものであると考えられた（三阪2015）。よって、本資料も厚仁会と記された美濃窯業株式会社製の硬質陶器と考えられる。（三阪）

## 註

- 1 佐々木由香氏の同定による。
- 2 煮炊きによるススの付着とは異なり、黒色化の一種と考えられるが、黒色化にしてはやや赤みが強く褐色である。  
庄・蔵本遺跡では弥生前期の壺に散見される。

## 文献

- 近藤玲（編），2014. 南蔵本遺跡：県立中央病院改築事業関連埋蔵文化財発掘調査報告書第1分冊，徳島県埋蔵文化財センター調査報告書第84集．徳島県埋蔵文化財センター，徳島．
- 工楽善通，1991. 水田の考古学．東京大学出版会，東京．
- 日下正剛，1998a. 遺構年代の決定方法．新蔵1丁目遺跡：企業局総合管理センター（旧副知事公舎）地点，総合管理センター（仮称）建設に係る埋蔵文化財発掘調査報告書，徳島県埋蔵文化財センター調査報告書第20集．徳島県埋蔵文化財センター，徳島，pp. 190-198．
- 日下正剛，1998b. 出土遺物の様相．新蔵1丁目遺跡：企業局総合管理センター（旧副知事公舎）地点，総合管理センター（仮称）建設に係る埋蔵文化財発掘調査報告書，徳島県埋蔵文化財センター調査報告書第20集．徳島県埋蔵文化財センター，徳島，pp. 199-221．
- 日下正剛，2000. 徳島城下町．江戸遺跡研究会（編），江戸遺跡研究会第13回大会発表要旨：江戸と国元．江戸遺跡研究会，東京，pp. 49-79．
- 日下正剛，2002. 土の中の大谷焼：描かれた文字から何がわかるか．徳島市立徳島城博物館歴史講座配布資料．徳島市立徳島城博物館，徳島，pp. 1-11．
- 三阪一徳，2014. 土器からみた弥生時代開始過程．古代学協会（編），列島初期稲作の担い手は誰か．すいれん舎，東京，pp. 125-174．
- 三阪一徳，2015. 立会調査の概要．国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室紀要1，145-154．
- 中村豊，2000a. 阿波地域における弥生時代前期の土器編年．田崎博之（編），突帯文と遠賀川．土器持寄会論文集刊行会，松山，pp. 471-498．
- 中村豊，2000b. 庄・蔵本遺跡発掘調査概要：新中央診療棟建設に伴う埋蔵文化財調査．徳島大学施設委員会・徳島大学埋蔵文化財調査室，徳島．
- 中村豊，2002. 前期末・中期初頭の諸問題：徳島地域．第16回古代学協会四国支部研究大会事務局（編），第16回古代学協会四国支部研究大会発表要旨集：弥生時代前期末・中期初頭の動態．古代学協会四国支部，愛媛，pp. 75-98．
- 佐々木由香，2014. 縄文人が利用した球根類．工藤雄一郎・国立歴史民俗博物館（編），ここまでわかった！縄文人の植物利用．新泉社，東京，pp. 34-37．
- 田尻義了，2013. 九州大学出土の硬質陶器について．平成25年度九州史学会考古学部会発表資料集．九州大学考古学研究室，福岡．
- 寺前直人，2010. 武器と弥生社会．大阪大学出版会，大阪．
- 梅木謙一，2003. 中国・四国地方の土器．武末純一・石川日出志（編），考古資料大観第1巻，弥生・古墳時代土器Ⅰ．小学館，東京，pp. 169-180．
- 山本悦世（編），2004. 津島岡大遺跡14：第15次調査（サテライト・ベンチャービジネス・ラボラトリー新営），岡山大学構内遺跡発掘調査報告書第19冊．岡山大学埋蔵文化財調査研究センター，岡山．